

子どもの事故 「窒息を中心に」

今回から少し子どもの事故について考えてみましょう。インフルエンザが流行ったり、やれ麻疹・水痘と病気が心配になります。しかし、0歳児の先天奇形を除くと、死因順位の1位(1〜14歳)は不慮の事故ということをご存知ですか？現在の日本では子ども全体の死亡率は低く、先進各国の中でもトップクラスの状況です。しかし、事故に目をむけると、年齢が低くなるに伴い、各国と比べて高率になっています。

従来事故は偶然的出来事で、予防することができないと考えられていました。しかし事故の研究が進むにつれて、子どもの行動や発達を理解することによって、予防可能なことがわかってきました。子どもの事故の種類は多く、また年齢によっても原因が変わってきます。2006年家庭内における不慮の事故(厚労省)の死因では、0歳児での死因第1位は不慮の窒息(機械的窒息)で83.6%を占

め、以下溺死・溺水、転落の順となっています。

機械的窒息の原因には、鼻口部の圧迫・気道異物などがあり、鼻口部の圧迫は柔らかな布団にうつぶせで寝ることが問題となります。またうつぶせ寝は、乳児突然死症候群との関係も指摘されているため、医師の指示がある場合などを除き、原則として避けるようにしましょう。他にも添い寝による事故もあり、赤ちゃんが小さいうちは同じ布団で寝ることは避け、あくまでも眠るまでの手段として考えてあげてください。次に多いのが気道異物です。乳児期前半では哺乳と共に空気を飲み込むことと、食道と胃のつながりが緩いため、嘔吐しやすくなります。吐物を吸引することを防ぐには、哺乳後に十分ゲップを出させ、しばらくは目を離さないことが重要です。止むを得ず目を離す場合には、タオルなどで上体を起こして短時間にするように心掛けましょう。

1〜4歳では、第1位が窒息で31.3%、溺死・溺水は26.3%、火災への暴露が21.2%、転落が14.1%となっています。窒息の割合も減少してきますが、ビー玉やお金などの異物による窒息の割合が高くなります。大きさ(直径)が問題となり3cm以下のものが危険とされ、防止のためには身の回りや手の届くところが大切です。窒息とは直接関係はありませんが、ビーナッツなどの誤嚥による肺炎が問題となるため、3歳以下の子どものには与えないようにしたいものです。

5〜9歳では、火・火災への暴露が50%と最も多く、以下転落・溺死・溺水、窒息の順となっています。窒息は多くありませんが、食事時の誤嚥の割合が多くなっています。コンニャクゼリーが原因のこともありました。予防のためには喉が大切になってきます。歩きながらの食事や食べ物や口に入れたままの会話をやめさせ、良く噛む習慣などを付けることも必要です。それ以外にも窒息の原因は身の回りにたくさんあります。ビニール袋やひもで遊ぶことも危険です。そんなことにも気を配りたいものです。

このように年齢によって原因が変わることの理由は、発達の過程と行動範囲の広さの違いによるものです。つまり子どもの発達や行動範囲に応じた対策をたて、大人たちが十分目を光らせていけば、多くの事故は予防できるということになるわけです。見逃しがちですが、最も大切な予防法のひとつです。子どもへの危険に対する判断は不十分です。状況に応じては、危険を見えさせるためにしっかり叱ることも大切です。親の責任と義務を考え、予防することを心掛けましょう。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診療にあたった。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会バネリストとして選ばれる。
AERA(アエラ)臨時増刊号 日本初! かかりつけ医を探すガイド「日本の家庭医 08」(7月5日号)の町のお医者さん1435人の中で紹介される。
<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>